病の実験モデルとしての先天性 Aganglionosis ラットについての詳細な検索はいまだなされていない。今回このラットについて光顕的，組織化学的，電顕的検索を行ない以下の所見を得た。本ラットの病態はヒトの long-segment, extensive aganglionosis に類似するもので，アセチルコリンエステラーゼ活性は狭小部腸管肛門側で増加を見たが，アドレナリン螢光は狭小腸管全域で低下していた。

21. 神経芽細胞腫肝転移例の1年生存

松清　央，緒方創　（君津中央）

5カ月男子，右側腹部より正中線を越えた腫瘤にて来院。VMA 109.6mg/day, LDH 1195, 皮膚転移巣穿刺細胞診等にて神経芽細胞腫，I. P., RI-scan, CT-scan 等により肝転移腫瘤として手術。原発不明の肝，後腹膜リンパ腺，皮膚転移のあるⅣ期神経芽細胞腫で試験開腹のみに終り，オンコビン0.5 mg iv/w，エンドキサン100mg in/w を6カ月間使用し，1年後の現在，VMA' LDH 正常化，RI-scan, CT-scan にても再発の徴候なく順調に発育している。

22. 開頭術後2日目に胃穿孔をおこした乳児の治験例

飯田秀治，鈴木　秀，伊藤文雄
香田真一，綿貫重雄，
（国立習志野）

髄膜炎，脳圧亢進，硬膜下血腫，減圧開頭術，低体温，低酸素血症などのストレスにより，胃小彎後壁幽門輪近くに穿孔を来した5カ月の乳児症例を穿孔部閉鎖及び胃瘻造設術により救命し得たので報告した。

23. 小児急性腹症の検討

丸山達興，大西盛光，関　幸雄
中村宏，山崎一馬
（川鉄病院・外科）

1974年4月から，78年9月迄に扱った，15歳以下の腹部緊急手術例は75例で，虫垂炎36例，嵌頓鼠径ヘルニア14例，腸重積9例，腹部外傷6例，であった。虫垂炎の正診率は90%であった。6歳以下は4例のみで，3例が穿孔例であった。腸重積症において，バリウム注腸整復成功率は，腸内ガスが正常な例では，8例中7例，小腸ループの拡張のあるものでは5例中2例であった。外傷性膵炎例では，外ドレナージ手術を2例行った。

24. 当院における小児ソケイヘルニアの経験と成績

小野和則，高井　満，小幡五郎
足立倫康，川村健児，小嶋邦昭
青柳栄一，丸山卓治
（松戸市立・外科）

昭和44年～52年の9年間に，我々が経験した小児鼠径ヘルニア768例（男：女＝2：1）について術後合併症を中心に検討し報告した。術後発熱42%，局所腫脹4%，睾丸左右不同1.5%，患側睾丸挙上14.9%，再発0.9%であり，局所腫脹，再発は，いずれも前期(44～46年)に多かった。最近，我々は主として，Lucas-Championniere 法を用いており，術後合併症も少なく，再発もなく，良い成績を得ている。

25. 国立千葉病院における小児外科手術例

○大野　了，山城敏行，佐々木徳秀
田宮達男，伊藤　力（国立千葉）

昭和48年より52年までの5年間，当院で行われた小児外科の手術例数は一般外科629例，脳神経外科85例，心臓血管外科288例，整形外科675例。一般外科では外鼠径ヘニア，急性虫垂炎，腸重積症，悪性腫瘍が上位をしめています。整形外科では骨折，斜頸，LCC，口蓋裂，兎唇，脳神経外科では水頭症，心臓血管外科では VSD, PDA, ASD，ファロー四徴が多く見られる。以上数字的な統計及び現況の紹介をふくめ報告します。

26. 船橋中央病院における小児外科的疾患の検討及び新生児胃穿孔の2例

○那須　武，（社会保険船橋中央・小児科）

1978年1月～11月の間に当院小児科で扱った小児外科的疾患（ヘルニアを除く）は，腸重積5，先天性胆道閉鎖2，大腸ポリープ2，急性虫垂炎2．小腸閉鎖，リンパ管腫，胃穿孔，臍瘻，神経芽細胞腫，化膿性リンパ節炎，ヒルシュスピルンク氏病各1である。つぎに，生後6日目の胃穿孔による剖検例と生後9日目の胃穿孔手術成功例を報告した。

27. 常用そけいヘルニア手術

柳沢文憲（白鷹町立病院）

小児のそけいヘルニア手術遂行にあたって，ハーケン，ツップェルが大事である。そのために Roux 式のハーケン，ヘルニア嚢切除のための特殊なシェーレを作成（いずれもアトム）し使用している。スライドにより